

スマホでの撮影も Lightroom で！

「作品」として写真を撮るときは、スマホ標準の「カメラ」アプリを使うよりも、「Lightroom」を使うのがオススメ …という話

※ この記事は iPhone について書かれていますが、Android 端末でもほぼ同様です。

※ 「RAW で撮るか？ JPEG で撮るか？」という話は、今回は取り上げません。RAW 撮影については、次回「写真部 Tips その5」で取り上げる予定です。

1. スマホ版 Lightroom は撮影もできる

「Lightroom」(ライトルーム、以下「Lr」)とは、Adobe 社が提供する、写真の編集・管理を行うためのソフトで、撮影した写真の明るさや色合いなどを細かく調整することができます。ソフトの名前には「従来、暗室 (darkroom) で行ってきたフィルム写真の現像作業と同じようなことが、明るい部屋でできます」という意味合いが込められているのでしょう。

元々パソコン用に作られたソフトですが、後に iPhone や Android 端末用に「Lightroom モバイル版」(スマホ版 Lr)も提供されるようになりました。スマホ版 Lr は基本的に無料で利用できるということもあって、近年は「カメラで撮った写真をスマホに転送して、スマホ版 Lr で写真を編集・管理する」という使い方をしている写真部の生徒も増えているようです。



このスマホ版 Lr ですが、撮った写真の編集だけでなく、実は「撮影」にも使えるということはあまり知られていないようです。そして、実際に撮影に使ってみると、むしろ「スマホ版 Lr は撮影にこそ使うべきアプリだ」と感じました。理由は、①「思い通りの写真」が撮れる、②「ふだんの写真」と「作品写真」を分けて扱える、の2つです。

2. おすすめ理由①：「思い通りの写真」が撮れる

カメラアングルや構図などはさておき、「思い通りの写真」を撮ろうとする場合に、カメラの操作の上で必要なのは、「ピント」、「露出 (=明るさ)」、「ホワイトバランス (=色合い)」あたりではないかと思います。これらの調整をしようとするとき、iPhone 標準の「カメラ」アプリよりも、Lrの方がやりやすいように感じます。(なお、Lrでは「AUTO」と「プロフェッショナル」のモードを選ぶことができ、以下は「プロフェッショナル」モードでの話です)

(1) マニュアルでピント合わせができる

iPhone 標準の「カメラ」アプリでは、画面上でピントを合わせたい部分を「タップ」することでピントを合わせます。一方の Lr では、ピント合わせの方法として「画面のタップ」以外に、「マニュアルフォーカス」という方法を選ぶことができます (図1を参照)。

この方法では、スライダーを使って「どの位置にピントを合わせるか」を手動 (=マニュアル) で調整することができます。また、ピントが合っている範囲は被写体の輪郭が緑色の線で強調されるので、どこにピントが合っているかも一目で分かります。ちょうど「一眼カメラで、マニュアルレンズを操作する感覚」に近いでしょうか。

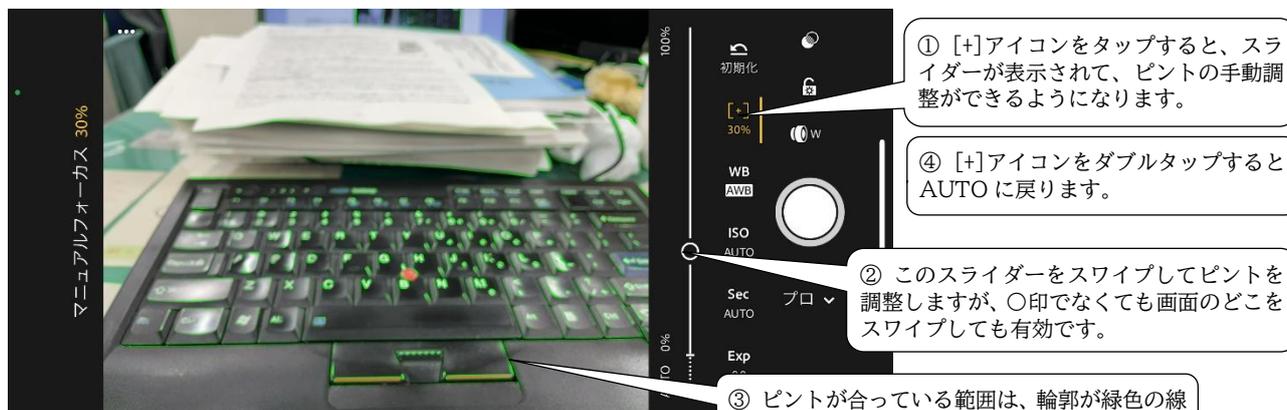


図1 iPhone 版 Lr の画面 (スライダーを使ったピント合わせ)

さらに、「画面タップ」でのピントを合わせの場合、タップした部分に露出（＝明るさ）も同時に合ってしまうのですが（画面内の黒っぽい部分をタップすると画面全体が明るめに、白っぽい部分をタップすると暗めに調整されてしまう）、マニュアルの場合は、露出はそのままピント位置だけを独立させて調節することができる、という点も便利です。

（２）素早く露出補正できる

「露出（量）」とは、カメラが取り込む光の量のことです。露出が多いと明るい写真になり、露出が少ないと暗い写真になります。しかし、カメラの設定を Auto にしておけば、カメラが自動でその場の明るさを判断し、絞り・シャッタースピード・ISO 感度を調整して「ちょうどいい露出」の写真にしてくれます。スマホの露出も基本的に Auto です。

ただし、Auto には弱点があります。「黒い被写体」や「白い被写体」を撮るときに適正露出にならないのです。画面内で「黒いもの」が占める割合が高い場合、当然カメラに入ってくる光は少なくなります。しかし、カメラには、それが「黒いもの」であるということが分からず、「この場所は暗い」と判断して明るめの露出にしてしまうため、できる写真は見た目より明るくなります（本来は黒い被写体がグレーになってしまう）。画面内で「白いもの」の占める割合が高い場合も同様で、できる写真は見た目より暗くなります（本来は白い被写体がグレーになってしまう）。そこで、そういう場合は、カメラが提示してきた露出を、人間が補正してあげる必要があるのです。これが「露出補正」と呼ばれるもので、カメラであっても、スマホであっても、「思い通りの写真」を撮るためには不可欠なものです。

iPhone の「カメラ」アプリで露出補正を行う方法は、A・B の 2 通りがあります。

方法 A 画面上の被写体部分をタップして、現れる四角いフレームの横の太陽アイコンをスワイプする（図 2 を参照）。

方法 B 露出補正ボタンを押して、画面の外に現れるスライダーをスワイプする。

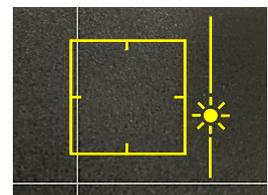


図2 iPhone のカメラアプリの画面（露出補正）

…ということで、どちらの方法でも、2 段階の操作が必要です。

これに対して、Lr では「いきなりスワイプするだけ」で露出補正ができます（しかもピント調節と同じで、画面内のどこをスワイプしても有効です）。1 段階で済むので素早い補正が可能です。また、[Exp] ボタンをダブルタップするだけで補正量を 0 に戻すことができます（「カメラ」アプリの場合は、スワイプしないと 0 に戻せません）。

（３）ホワイトバランスを設定できる

iPhone 標準の「カメラ」アプリでは、ホワイトバランス（＝色合い）は Auto のみ。つまり、完全にカメラ任せで、自分で設定することはできません。一方の Lr では、「Auto」、「タングステン」、「蛍光灯」、「昼光」、「曇天」、「カスタム」の中から選ぶことができます。

これら以外にも、Lr では、「シャッタースピード」と「ISO 感度」も自分で設定することができます。これらの設定は、それぞれ画面上のボタンをダブルタップすると初期値に戻すことが可能です。さらに、「初期化」ボタンをタップすることで、これら全ての設定を同時に初期値に戻すことができます。

3. おすすめ理由②：「ふだんの写真」と「作品写真」を分けて扱える

ここでは「ふだんの写真はスマホ標準のカメラアプリで撮り、作品写真は Lr で撮る」という使い分けをすることを提唱します。「一つのスマホに 2 台のカメラを入れて、2 台を切り替えて使う」という状態にするのです。

（１）撮影時に、標準アプリと Lr を切り替える

簡単な集合写真やメモ代わりの写真など、プリントアウトすることなくスマホの画面で見ただけの「ふだんの写真」を撮るときは、これはもう絶対にスマホ標準のカメラアプリにお任せした方がいいです。撮影者は何も考えずにシャッターを切るだけで、あとはスマホが、白飛びもしない、黒つぶれもしない、「何が写っているかが分かる画像」を確実に残してくれます。

一方、「あっ、これは作品になる」という被写体を見つけたときは、鞆からカメラを取り出す代わりに Lr を起動して、あれこれ考えながらピントや露出を調整して、じっくりと「自分で」撮るのです（このとき、できれば「RAW」で撮ることをおすすめしますが、その件については別の機会に…）。

標準のカメラアプリでも、露出補正や、RAW データの保存などは可能ですが、1つのアプリの中でこれらの設定を切り替えるには、メニュー画面を呼び出すなどひと手間かかりやすく、設定を戻すのを忘れたまま撮り続ける、というようなこともありがちです。例えば、標準のアプリでRAWモードのまま撮り続けると、データ量が膨大になってしまいます。

これに対して、標準アプリと Lr という2つのアプリを使い分ける方法であれば、手早く切り替えることができますし、間違いが少なくなります。

なお、iPhone のロック画面やウィジェット画面（ホーム画面から左側に進んだ画面）にウィジェット（＝ショートカット）として Lr を登録しておけば、Lr の起動も標準アプリと同様に「一発」で行うことができるようになって、非常に便利です（図3を参照）。しかも、ウィジェットから起動した Lr は、最初から「カメラ画面」になっているので、手間がかかりません（普通にホーム画面のアプリアイコンから Lr を起動すると最初は「編集画面」になっているため、カメラ画面に移動するのにもうひと手間かかる）。同様に、Android でもウィジェットからの「カメラ画面」起動ができるようです。

まさに「一つのスマホに2台のカメラが入っていて、状況に応じてその2台を切り替えて使う」という感覚です。



図3 iPhone のロック画面（Lr のウィジェットが登録されている）

（2）撮影データの管理がしやすくなる

iPhone 標準の「カメラ」アプリで撮った写真は、「写真」アプリ内の「カメラロール」に保存されます。この「カメラロール」には、スクリーンショットや他のアプリで保存した写真、AirDrop やメールなどで他の人から受け取った写真も保存されるため、大量の写真が混在することになり、管理がとても大変です。

一方、Lr で撮った写真は、Lr 内の独立した「Lightroom アルバム」に保存されるため、「作品写真」だけを他の大量の写真と分けて管理することができます。もちろん、Lightroom アルバムに保存した写真も、カメラロールにコピーすれば、他の写真と同様に扱うことができます。

ふだんの写真はいつもの「カメラロール」に、作品写真は「Lightroom アルバム」に、分けて保存するようにすると、撮影データの管理がしやすくなるのです。

いかがだったでしょうか？ スマホ版 Lr を、編集だけでなく「撮影」に使うメリットが伝わったでしょうか？

写真専門部としては、「作品」作りには、やはりカメラを使用することを推奨しています。しかし、いつでもカメラが手元にあるとは限りません。この記事が、スマホを使って「作品」写真を撮る際の参考になれば幸いです。

2025年7月作成

福岡県高等学校芸術・文化連盟 写真専門部

追加事項

- ・筆者は iPhone 12 を使ってこの記事を執筆しています。iPhone 12 では標準の「カメラ」アプリで RAW 撮影ができませんが、Lr のようなアプリを入れることで RAW 撮影が可能になります。
- ・RAW 撮影できるアプリは Lr だけではありませんが、Lr は基本的な機能だけであれば完全に無料で使え、登録なども不要である点が安心して使えると感じます。
- ・iOS 14.3 以降を搭載した iPhone 12 Pro 以降の Pro モデルでは、標準の「カメラ」アプリでも RAW 撮影が可能です。ただし、「JPEG に戻すのを忘れて RAW で撮り続けて、ストレージが圧迫される」という危険があります。
- ・この記事は主に iPhone について書いていますが、Android 端末でもほぼ同じだろうと推測されます。ただし、Android のカメラ機能は機種や OS のバージョンによって大きく異なり、標準のカメラアプリが Lightroom と同等以上の機能をもつ機種もあるようです。それでも、本稿の「おすすめ理由②」については通用するのではないかと思います。